

## 濱文庫の概要と現状：1930年代を中心とする中国演劇資料の宝庫

中里見，敬  
九州大学言語文化研究院准教授，附属図書館研究開発室室員

中尾，友香梨  
佐賀大学文化教育学部准教授

山根，泰志  
九州大学附属図書館資料整備室図書目録係員

<https://doi.org/10.15017/24951>

---

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報。2011/2012，pp.14-23，2012-07。九州大学附属図書館  
バージョン：  
権利関係：

論文

濱文庫の概要と現状  
— 1930年代を中心とする中国演劇資料の宝庫 —

中里見 敬† 中尾友香梨‡ 山根 泰志§

<抄録>

九州大学附属図書館の濱文庫は、1930年代を中心とした中国演劇資料のコレクションとして国内屈指のものである。本稿では、中国演劇研究者・濱一衛によるその収集から濱文庫受け入れまでの経緯、濱文庫の特色、電子化を視野に入れた目録やデータベース作成の現状と課題について報告する。

<キーワード> 濱文庫, 浜文庫, 濱一衛, 浜一衛, 中国演劇, 京劇, 周作人, 戯単, 唱本, 明清楽, 目録

A Treasury of Chinese Theater of the 1930's

— An Introduction to the Hama Collection of Kyushu University Library —

NAKAZATOMI Satoshi, NAKAO Yukari and YAMANE Yasushi

1. 濱文庫の収集と受け入れ

現在、九州大学附属図書館中央図書館に設置されている濱文庫は、中国演劇研究者であった濱一衛<sup>はまかずえ</sup>・元本学教養部教授の旧蔵書のうち、中国演劇関係の資料を中心に特殊文庫として受け入れたものである。まず濱一衛の略年譜を記すと、以下のようである。

- 1909年 大阪生まれ
- 1930年 (旧制)浪速高等学校卒業, 周豊一と同学
- 1933年 京都帝国大学卒業, 中国文学を専攻
- 1934年5月~1936年6月 北平に留学, 周作人宅に寄寓する
- 1938年 松山高等商業学校着任
- 1949年 九州大学教養部着任
- 1956年 中国訪日京劇代表団の欧陽予倩副団長と福岡で会談
- 1969年4月~1973年3月 附属図書館教養部分館長
- 1973年 九州大学教養部定年退官
- 1984年 逝去

濱文庫の核となる資料は、1934年から2年間にわたる濱の北平留学中に収集した中国演劇資料である。濱は留学中、北京大学教授で新文学運動の中心的人物であった周作人邸に寄寓した。北京城内の西北に位置する八道湾の四合院は、紹興から北京に移った魯迅・周作人・周建人兄弟が1919年に購入した住まいであったが、1923年8月に魯迅は周作人との不和により、母・

魯瑞, 妻・朱安とともに八道湾から転居してしまう。したがって、濱の留学時には魯迅は同居しておらず、周作人夫人の羽太信子, 弟・周建人と夫人・羽太芳子(信子の妹), 信子・芳子の両親等が同居していたらしい<sup>1</sup>。周作人邸に寄寓することになったのは、濱が旧制浪速高等学校で周作人の長男・豊一と同学であった縁による。濱は幼少の頃より親に連れられて盛んに観劇し、芝居通となった。しかし、なぜ中国の演劇を専攻するようになったのか、その理由は文章として残されていない。周豊一との交友を契機に中国に関心を持ったのか、それとも逆に中国に関心があったので豊一と親しくなったのか、その先後関係は不明である。

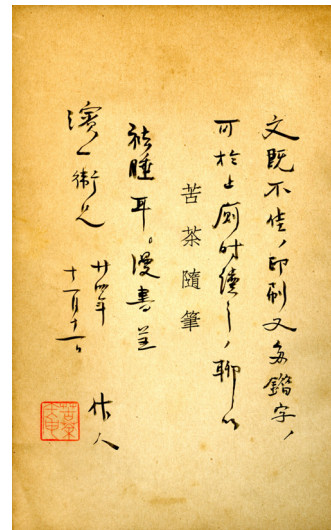


図1 周作人『苦茶隨筆』(上海:北新書局, 1935) (濱文庫/新学評論/4)

† なかざとみ さとし 九州大学言語文化研究院准教授, 附属図書館研究開発室室員 E-mail: naka@flc.kyushu-u.ac.jp

‡ なかお ゆかり 佐賀大学文化教育学部准教授 (〒840-8502 佐賀市本庄町1番地)

§ やまね やすし 九州大学附属図書館資料整備室図書目録係員 E-mail: saden@lib.kyushu-u.ac.jp

こうした事情により、濱文庫には周作人より贈られた署名入りの本が3冊<sup>2</sup>、また周豊一の署名入りが1冊<sup>3</sup>あり、中国現代文学の著名な大家である周作人と中国演劇研究を志す若き留学生・濱一衛の交流を証する貴重な資料となっている(図1)。

1984年の濱の没後、合山究・教養部教授(当時)の尽力によって濱文庫が九州大学附属図書館教養部分館(六本松分館の前身)に受け入れられることとなり、東京大学東洋文化研究所の田仲一成教授(当時)が個々の資料の評価額査定にあたった<sup>4</sup>。2500点もの資料一つ一つに値段をつけるという気の遠くなるような作業は、田仲先生によれば、倉石武四郎の旧蔵書を東洋文化研究所に受け入れた際に古書店から得た情報が役立ったという。1986年、こうした関係者の努力によって濱文庫が設立され、早くも翌1987年には当時の教養部分館受入掛長・落石清氏の手で『濱文庫(中国戲劇関係資料)目録』(九州大学附属図書館教養部分館)が作成された。82点の補遺を追加した同目録の第二刷も1988年に刊行され、これが現在に至るまで濱文庫の最も完備した目録となっている。補遺で追加された資料は二種に大別される。一つは濱文庫の中から特に貴重な資料を選んでマイクロフィルム(ネガおよびポジ)にしたもの。それには漢籍以外にも、新聞切り抜きや雑誌のマイクロ化も含まれ、さらにレコードのカセットテープへの録音も含まれている<sup>5</sup>。二つ目は当初受け入れから漏れた抜き刷り等の零細な資料、および濱自身のノートや原稿類である。講義ノートや未刊原稿は、濱の教育と研究における業績を知るうえでこのうえなく貴重な資料であるが、これについても追加受け入れの決定にあたっては田仲一成先生の助言があった。その後もさらに、濱先生の研究室に未整理のまま残されていた若干の資料が、後任の山田敬三、岩佐昌暉へと受け継がれ、2005年岩佐先生の退任時に附属図書館六本松分館へ納入された。この最後に追加された若干の資料については、2008年当時の六本松分館図書情報係・徳元美智子氏によって目録が作成された<sup>6</sup>。以上の資料が、六本松キャンパスの閉鎖に先立つ2008年9月、箱崎キャンパスの中央図書館貴重書庫へ移管されて、現在の濱文庫となっている。なお、伊都キャンパスに新中央図書館が完成する2017年(予定)には再移転されることになっている。

## 2. 濱文庫の特色

濱文庫の特色は以下の3点にまとめられるだろう。

(1) 1934~36年の北平留学中に収集可能なあらゆる演劇関係資料を網羅していること。

濱の留学期間は民国23~25年にあたるが、当時なお民国初期や清末に刊行された書籍等も入手可能であっ

たようで、濱文庫は一定の時間的幅をもった資料群からなる。濱文庫は清末から民国までの時期の中国演劇事情を伝える一級の原資料だといえる。一方で、濱がとくに古い宋元版や珍しい善本を収集した形跡は認められない。濱文庫の中で最も古いものは、元・李文蔚撰、明・臧晋叔校『同楽院燕青博魚雜劇』(浜文庫/集93/1-2)のようである。これは明末の万暦43~44年(1615~16)に臧懋循(字は晋叔)が刊行した『元曲選』100種の端本である。

(2) 濱先生が生涯をとおして収集した資料が整理されていること。

濱は留学から帰国後も、中国演劇に関する資料を精力的に収集し続けた。例えば、中国の新聞から演劇関係の資料を切り抜いた「戲劇関係新聞切抜帳 中華民国編」(浜文庫/集182/1-14)、「戲劇関係新聞切抜帳 中華人民共和国編」(浜文庫/集183/1-31)、「北京晨報・京報劇刊抜萃切抜一卷」(浜文庫/集184/1)がある。これには北平留学開始直後の1934年6月28日『大公報』の記事に始まり、逝去2年前の1982年8月31日までの記事が丹念にスクラップされている。雑誌やレコードも解放前後まで収集され、演劇関係の専門書については解放後も香港経由で輸入業者から購入を続けたようである。

(3) 戯単・唱本などのエフェメラを多く含むこと。

濱文庫の最も特色ある資料は、この部分にあるといえるだろう。エフェメラ(ephemera)とは、本来保存されることのないその場限りの資料を指す用語で、近年とくに社会史的な観点から注目されている<sup>7</sup>。書籍や雑誌・新聞等のメディアが、編集や出版の過程で書き手や出版者といった権威、あるいは権力による取捨選択を蒙らざるをえないのに対して、エフェメラには当時の情報が生のままで記載されていることが多い。一部の好事家による収集対象でしかなかった戯単のようなエフェメラが、演劇博物館以外でこのようにまとまって存在する例は珍しい。ほかにも1956年、戦後初の中国訪日京劇代表団による公演のパフレットやチケットなどが残されている。

### 2.1. 濱文庫の戯単(芝居番付)

濱文庫には全部で186枚の戯単が所蔵されている。時期的には1931年8月25日から1939年5月4日まで、地域的には北平が170枚と圧倒的に多く(話劇1枚を含む)、ほかに奉天、天津、開封、上海、蘇州、湖州南潯鎮のものを含む。その大半は濱自身が観劇したときの戯単であり、北平以外のものも旅行中に観劇した戯単であることを確認できるものもある。これらの戯単を調べれば、濱が留学中にどの劇場でどの芝居をどのような頻度で観ていたかを知ることでもある。また戯

単は、実際の劇場でどの俳優がどの演目を演じていたかを知るための貴重な第一次資料であり、濱文庫の戲単に記された演目・俳優名等の情報は、松浦恒雄氏によりデータベース化されている<sup>8</sup>。

日本国内の戲単としては、名古屋大学附属図書館青木（正児）文庫に所蔵される1925～28年の戲単29枚が知られている<sup>9</sup>。これと比較すると、濱文庫の戲単は時代が下るものの、圧倒的に数量が多い。また濱文庫の戲単は、木活版（図2）や石印から鉛活字（図3）へと印刷方法が変化した時期を反映して、多様な様式の戲単がある点に特徴がある。濱自身も、

すり切れた木版活字を用いた下手物臭紛々たる、あの愉快な廣和樓の戲單子も今春以來安つばい活字印刷となった。<sup>10</sup>

只今では活版か石版刷りですが、以前は木活の風雅なもので、つい七八年前迄は廣和樓の番付がそれで、愉快なものでした。<sup>11</sup>

と、広和樓の古い様式の戲単を懐かしがっている。

濱が留学から帰国後の戲単も数点所蔵されており、その中には1937年の盧溝橋事件後、日本の占領下に置かれた北京の戲単も含まれる。これは両面印刷二つ折

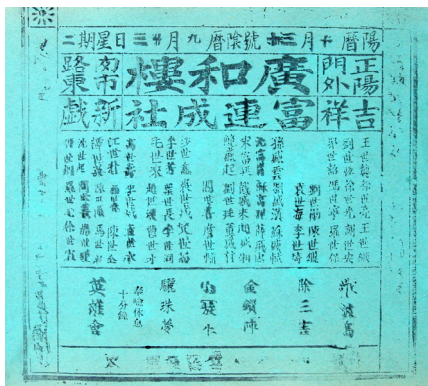


図2 1934年10月30日広和樓の木活版の戲単  
(濱文庫/集181/4)<sup>12</sup>

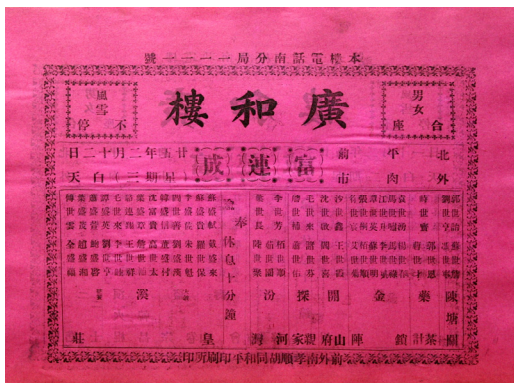


図3 1936年2月12日同じ広和樓の鉛活版の戲単  
(濱文庫/集181/80)

りで、演劇関係や時事ニュース、さらに広告も掲載して新聞のような戲報へと発展したものである（図4,5）。日本軍が戲報を宣伝工作に利用して、一般市民を懐柔しようとしていたことも、「日華携手和平乃現、亜陸同春國運更新」といったスローガンからうかがえる。

松浦恒雄氏によれば、中国で出版された戲単の図録は片面しか撮影していないが、濱文庫所蔵の戲単は裏面に記載された予告や広告等の情報も読み取ることができる点で貴重だという<sup>13</sup>。残念ながら台紙に貼り付けられて請求番号の付与された整理済みの戲単118枚は裏面を見ることができないが、未整理のまま保存されている68枚については両面を見ることができる。なお、台紙に貼られた戲単の多くは片面印刷のようであり、両面印刷の戲単は意図して貼り付けられなかった可能性もある。

『濱文庫（中国戲劇関係資料）目録』の75頁には、

〈中國戲劇公演戲單子「番付・プログラム・パンフレット類」一百三十四枚〉1186008655

民國二十三～二十八年 一帙 一百三十四枚  
濱文庫集 一八一 1～134

と一括して著録されている。そこで、戲単一枚ずつについて、年月日、曜日、昼夜興行の別、劇場名、科班

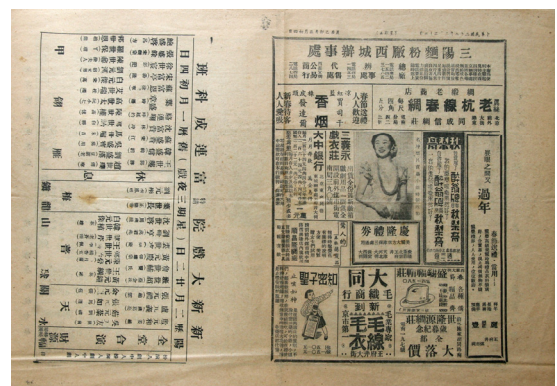


図4 1939年2月22日新新大戲院の戲單の表面  
(濱文庫/集181/未整理)

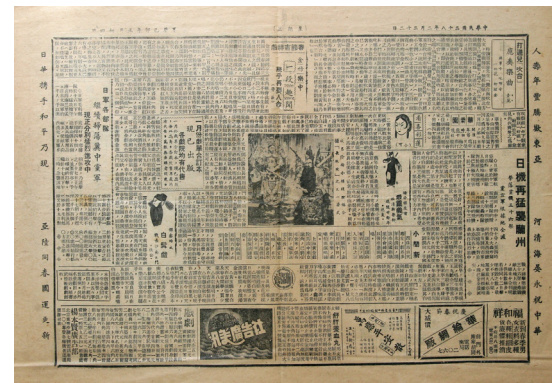


図5 同上の裏面  
(濱文庫/集181/未整理)

等の情報を採録したうえで、年月日順に番号を付した「濱文庫所蔵戲単編年目録」が中里見によって作成された<sup>14</sup>。これは未整理の戲単も加えた全186枚の編年目録であり、『濱文庫目録』を補完するものである。

## 2.2. 濱文庫の唱本

中国で一般に「唱本」といえば説唱文芸（一人の語り手、唱い手によって物語が叙述される語りもの、唱いもの）のテキストを指すが、日本では「劇本」、すなわち演劇（複数の俳優がそれぞれ作中人物を演じる）のテキストを含めて唱本と呼びならわすこともある。濱文庫の唱本も、説唱文芸と演劇の両方を含む。テキストの形態は約15cm×10cm大、10葉以下の薄い小冊子であり、俗字を多用した粗悪な作りであり、印刷技術の発展にあわせて木版本・石印本・鉛活字本がある。大雅の堂にのぼる漢籍と違って、唱本は読み捨てられるエフェメラであるから、通常の漢籍目録に著録されることはない。しかし、民間の演芸で唱われていた歌詞を記録した唱本は、民間文芸の貴重な資料であり、中国・台湾・日本等で近年徐々に整理・出版や研究が行われるようになってきた<sup>15</sup>。

濱文庫所蔵の唱本は、『濱文庫（中国戲劇関係資料）目録』によると、光緒8年～民国24年のもの計1053冊からなる。日本国内で唱本を所蔵する文庫としては、早稲田大学図書館風陵文庫（澤田瑞穂旧蔵）の約1370種（宝巻215種を含む）<sup>16</sup>、東京大学東洋文化研究所雙紅堂文庫（長澤規矩也旧蔵）の652冊<sup>17</sup>、東京大学東洋文化研究所倉石文庫（倉石武四郎旧蔵）の170冊<sup>18</sup>などが知られている。濱文庫所蔵唱本の特徴は、まず数量が多いことである。出版地は北京のものが最も多いが、鄭州、洛陽、西安、蘇州などのものを含み、北京以外の地方での説唱文芸（梆子腔など）を知ることのできる資料としても貴重である。

濱自身は北平で唱本を入手した経緯について述べていないが、長澤規矩也の次の記述がある程度参考になるかもしれない。

馬隅卿（廉）と往來したのは昭和二年に始まり、毎年の在燕中は度々彼を北河沿の孔徳學校に訪ね、個人及び學校の藏書を見せて貰ひ、清代北京に百本張とよぶ寫本の唱本賣りがゐたことを知つたが、翌四年七月に行つたときには、松筠閣に夥しい唱本を發見した。百本張の書目も、工尺譜のついたものも、身段（しぐさ）のあるものも、高腔の曲本も、雜曲の唱本もあつた。

書物を集めるときに値切ると、珍しい本を最初に見せてはくれないのが古書賈の常であるとは、かねて文求堂主人から聞いてゐた。そこで、滯燕中、いつも來訪する書賈の本は値切らずに、「留下

罷」といつては殘し、書店名と書價とを記した札を誰にでもわかるやうに頭一本から下げて棚の上に置いた。すると、來訪の書賈が、自分の順番が来るのを待つてゐる間に勝手にその札を見て、翌日には、同一書をもつと安い價格で持つてきたり、同一類の書物を探して來たりして、便利であつた。

かやうにして、やがて文激閣・來薰閣・保萃齋・文萃齋などからも鈔寫の曲本を得た。是等の中には内鈔本即ち宮中の寫本も多かつた。當時、北京の各圖書館ではこのやうな曲本を全く購はなかつたし、買つてもリベートを取られるので、書賈は私の許には喜んで持つて來たのである。この中で、内鈔本は日本では全く見られないし、身段の注記がある本は北京でも珍しいとて、一緒にこれらの唱本を整理分類してくれた傳惜華君にその大半を贈つたが、三經堂蔣蘭韻鈔本が多かつた。又、文激閣高君から買つた中の「文藝齋」の印記のある桃花記・大明興隆・回龍傳・銀盒走國の四種は、傳君の話に據ると、清代に饅頭を賣つてみた蒸鍋鋪で貸本として使つたものださうである。<sup>19</sup>

他方、濱の旅行記には開封の相国寺境内の露店で唱本を買つたという記述が残されており、鄭州・洛陽の唱本はそのとき購入したものだと推定される<sup>20</sup>。西安、蘇州も旅行で訪れていることから、地方の唱本も訪問時に自ら購入したものと思われる。

『濱文庫（中国戲劇関係資料）目録』は1000冊を超える唱本について、1冊ずつタイトルを採録し、1帙ごとにおおまかな出版地、出版者、出版年といった重要な書誌的事項を記しており、概略を知るには十分に有用である。しかし、風陵文庫や雙紅堂文庫にはそれぞれ唱本目録があるので、濱文庫についてもより詳しい唱本目録の作成が2010年より開始され、継続中である。作成にあたっては、『風陵文庫目録』の体裁に範をとり、冠称（タイトル）、請求番号、出版地、出版者、出版年、抄刻の形態、葉数、冊数、サイズ、巻首、封面、巻尾、板心を著録し、さらに本文巻頭の一行ないし二行を転記する。また、雙紅堂文庫および風陵文庫の唱本は画像が公開されているので、可能な限り濱文庫蔵本と対照させ、同版、異版、覆刻等の注記を付している。

## 2.3. 濱文庫の明清樂資料

濱文庫には明清樂資料も10点ほど所蔵されている。明清樂とは江戸時代に伝わった中国明清時代の音楽であり、江戸中期から明治中期にかけて流行した<sup>21</sup>。したがって日本でも多数の樂譜や樂器図が出版されており、濱文庫には明樂資料が2点、清樂資料が8点ほど所蔵されている。ただ明樂資料の2点（『魏氏樂譜』浜文庫／新学音楽／12と『魏氏樂器図』浜文庫／新学音

楽/13)はそれぞれ西田文庫本と碩水文庫本(いずれも九州大学附属図書館)の写真版である。

一方、清楽資料にはいくつか特徴的なものが含まれている。まず『清楽曲牌雅譜』(三卷三冊)は河副作十郎という人物によって編纂され、明治10年(1877)に大阪で出版されたものである(図6, 浜文庫/集51/1)。河副はもともと長崎唐通事家系の出身であり、蔵版元の「杏村書舎」は彼が大阪で中国語を教授した私塾の名前である。杏村書舎では中国語教育の一環として清楽を教授していたと考えられるのである。ちなみにこの資料は波多野太郎『月琴音楽史略暨家蔵曲譜提要』(『横浜市立大学紀要』人文科学第7編・中国文学第7号, 1976年10月)に影印が掲載されている。

次に、同じく明治10年に大阪で出版された清楽譜として『月琴楽譜』(図7, 浜文庫/集66/1)がある。濱文庫には利巻と貞巻しか所蔵されていないが、国立国会図書館には元・亨・利・貞の4冊揃いのものがある。ただ国会図書館の目録の「責任表示」には「中井新六編」と記されており、これには少し注記が必要である。というのは、本資料には「飛来堂蔵版」という



図6 『清楽曲牌雅譜』(浜文庫/集51/1)

蔵版印が附されており、「飛来堂」は「平井堂」のもじりで、関西一帯で清楽の勢力を張った平井連山の堂号であったと推測されるからである。つまりこの資料の著者は平井連山であり、中井新六(出版元群仙堂主人)はその編輯作業と具体的な出版業務を担ったと考えるべきであろう。なおこのことは楽譜に寄せられた題辞や賛詩からも窺える。例えば、篆刻家・画家の羽倉可亭の題辞には「為連山女史(連山女史の為にす)とあり、漢詩人長梅外の題詩には「寄題連山子月琴(連山子の月琴に寄題す)とある。本資料にはほかにも田能村竹田の養子である直入の口絵や、その養子である小斎の挿絵、画家であり篆刻家であった行徳玉江の篆字、学者であり官吏であった谷鉄臣の賛詩など、数多くの著名人の賛・詩・書・画が散りばめられており、このようなことから本資料はおそらく平井連山が関西である程度清楽の基盤を固め、知名度を上げた後の作品であると推測されるのである。

清楽譜に最も多く見られるのは図8のような折帖の豆本である。コンパクトで携帯に便利であり、演奏時には開きやすいという利便性に優れていたと考えられる。濱文庫にはこの形式の清楽譜が4種類ほど所蔵されており、その詳細は下記のとおりである。

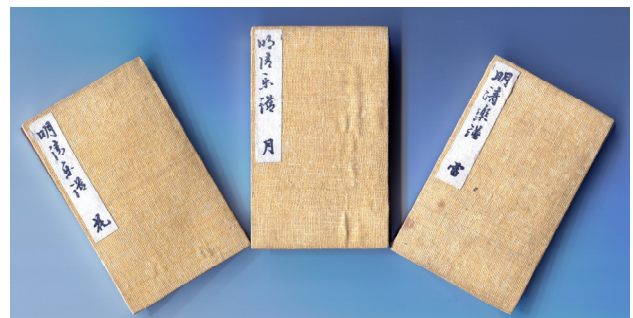


図8 『声光詞譜』(浜文庫/集44/1~3)



図7 『月琴楽譜』(浜文庫/集66/1)



図9 『清楽詞譜和解』(浜文庫/集65/1)

- ① 平井連山著『声光詞譜』(天・地・人), 外題は「明清楽譜」, 明治5年(1872), 大阪。(浜文庫/集43/1~3)
- ② 吉見重三郎編『声光詞譜』(雪・月・花), 外題は「明清楽譜」, 出版年・出版地不明, ①の増補版。(浜文庫/集44/1~3)
- ③ 植西鉄也著『声光詞譜』(天・地・人)と編者不明『声光詞譜』(雪・月・花)の合巻, 外題は「秘曲明清楽譜」(天・地・人)と「明清楽譜」(雪・月・花), 前三巻の出版年・出版地は明治27年(1894), 大阪。後三巻の出版年・出版地は不明, 所収内容は②と同じ。
- ④ 宇喜多小十郎編『明清楽歌譜』, 明治10年(1877), 滋賀。(浜文庫/集45/1~6)

濱文庫にはほかに『清楽詞譜和解』という資料がある(図9, 浜文庫/集65/1)。題名からわかるように, 清楽の歌辞に日本語で注釈を施したものであるが, その注釈はかなり詳しくしかも正確である。明治25年(1892)に東京文学館より出版された洋装本であり, 著者は漢学者の田中従吾軒(諱は参, 字は子忠, 通称は弥五郎)である。

## 2.4. その他

### 2.4.1. 「民衆小説戯曲読本」

(浜文庫/集180/1~32)

濱文庫には「民衆小説戯曲読本」32種が所蔵されている。サイズ14.0cm×11.1cmの洋装本である(図10)。これは伝統的な科班に代わって, 近代的な学校制度による京劇俳優の養成機関として1930年北京に設立された中華戯曲専科学校の作成・使用したテキストである。松浦恒雄氏の研究によると, 現在確認できる「民衆小説戯曲読本」は38種で, おそらく全4批40種が刊行されたと推定される。そのうち32種を所蔵する濱文庫は, 中国を含めても最大の所蔵機関だという<sup>22</sup>。



図10 『南天門』(民衆小説戯曲読本, 上海:世界書局, 1935)(浜文庫/集180/3)

伝統的な科班では俳優は口で唱詞や科白を教授されるのに対して, 中華戯曲専科学校では新たに編纂された台本に基づいて教育が行われた。「民衆小説戯曲読本」はそのような目的のために, 南京戯曲音楽院北平分院研究所および中華戯曲専科学校に附設された戯曲改良委員会によって整理・編纂された台本集である。

「民衆小説戯曲読本」は民国期における京劇台本の整理の実態を解き明かすだけでなく, 人民共和国の演劇改革にまでつながる京劇変遷史を研究するうえでも重要な意義を有する資料であることが, 最近の松浦恒雄氏の研究によって明らかにされた。

### 2.4.2. 『新刻校正買賣蒙古同文雑字』

(浜文庫/経13/1)

商人向けの中国語・満洲語・モンゴル語の対照語彙集で654語を絵入りで表記した漢滿蒙合璧本。濱文庫本は, 封面に「滿漢同文/新出對像蒙古雜字/京都打磨廠錦文堂梓行」(前二行には「滿漢同文/新出對像蒙古雜字」の満洲文字による音写 man han tung wen / sin cu dui siyang monggo dza dz を併記する。図11), 巻首に「新刻校正買賣蒙古同文雑字」(図12), 巻尾に「嘉慶辛酉年新刻中和堂梓行」(図14)とある。嘉慶辛酉年は清・嘉慶6年(1801)。中国の国家図書館には, 嘉慶6年京都老二西堂刻本を蔵し, 738語を載せるという<sup>23</sup>。濱文庫本の第1~2葉は補版であり, その絵図は3葉以下の精緻さに比べると拙劣である(図13)。一方, 原板である第3葉以下は版木が摩滅した後刷りである。また3葉表と4葉裏が一枚の版木に彫られ, 中間の3葉裏と4葉表が省略されている。以下, 同様の例が6葉表/7葉裏, 12葉表/13葉裏, 18葉表/19葉裏, 22葉表/23葉裏, 28葉表/29葉裏, 34葉表/35葉裏, 39葉表/40葉裏, 42葉表/43葉裏, 47葉表/48葉裏に見られ, その結果, 濱文庫本は老二西堂刻本より語彙数が少なくなっている。こうしたことから濱文庫本は老二西堂から中和堂, 錦文堂へと版元を変えた後印本である可能性が高い。賈敬顔・朱風合輯『蒙古譯語女真譯語匯編』(天津:天津古籍出版社, 1990)に翻字が収録されている『新刻校正買賣蒙古同文雑字』は, 同治年間(1862-1874)の修補本によるものであるが, 語彙数や内容はかえって濱文庫本とほぼ一致する。

第1葉から第39葉2行目までは1行3段で, 上段は右に中国語, 左にその満洲文字による音写(封面と同じく満洲語ではなく, あくまで中国語の音写), 中段は対象となる単語の図像, 下段は左にモンゴル語, 右にその漢字による音写を記す。

第39葉3行目から第53葉までは1行4段で, 先の上下2段を二つ重ね, 中段の図像が省かれる。ここには抽象名詞や動詞, 「你從那里來」(どちらからおいで



図 11 『新刻校正買賣蒙古同文雜字』  
(濱文庫/経 13/1) 封面



図 12 同上, 卷首



図 13 同上  
補版の第 2 葉 b 面 (右) と原版の第 3 葉 a 面



図 14 同上, 卷尾

ですか)、「不賣」(売らない)、「不買」(買わない)、「你这里坐」(こちらにおかけ下さい)といった短文が収められる。

清代に刊行されたモンゴル語辞書には官版もあるが、本書は商人向けの実用性に重きをおいた民間の坊刻であることに特徴があり、また図解語彙集の早い例である。携帯に便利な 15.0cm×10.7cm のサイズで、版内内は 12.1cm×10.0cm。本書は国内では濱文庫以外には東洋文庫にしか所蔵されない<sup>24</sup>。

本書が演劇関係の書籍にまぎれて濱文庫に入った理由は、おそらく刊行元の錦文堂がのちに唱本を多く出版するようになったため、唱本とともに一括購入されたからであろう。本書と唱本は同サイズであり、坊刻出版の状況を知るうえでも興味深い。

### 3. 濱文庫の現状と課題

濱文庫の移転、資料保管状態、目録作成・データベース化について、早稲田大学図書館風陵文庫および東京大学東洋文化研究所雙紅堂文庫と比較しつつ現状を説明する。

#### 3.1. 六本松分館からの移転

前述のように、濱文庫は六本松分館から中央図書館貴重書庫に移転した。しかし、元々六本松分館が所蔵していた貴重資料が多種多様であるうえ、移転先が分散しているため、どの資料がどこへ移転したのか、正確に把握している人は少なく<sup>25</sup>、所在を明確にする必要がある。

また、六本松分館に所蔵されていた濱文庫・檜垣文庫以外の和漢古書については、一括して中央図書館保存書庫に移転された。中には貴重書にすべきものが含まれているため、調査を進めたところ、宋版本『仏説仁王護国般若波羅密経』(三聖寺旧蔵・頼山陽識語)をはじめ、『唐詩品彙』(成化 13 年序刊)、『楚騷綺語』(萬曆 4 年序刊・杭州楊氏豊華堂旧蔵)、『拍案驚奇』(萬元樓本)等の貴重な漢籍や、中国文学関係の刊本を多く含む検事大井七郎の旧蔵書(大井文庫)等が見出された。『九州大学附属図書館教養部分館漢籍目録』(1971)の濱(当時教養部分館長)のはしがきにより、彼が日常的に図書館の漢籍を利用していたことがわかるが、これら旧制福岡高等学校以来蓄積された漢籍も、濱の教育・研究を支えたものということができる。

#### 3.2. 資料保管状態

濱文庫の和漢古書類のほとんどは帙に収納されており、そうでないものも中性紙の容器に収納されている。しかし、清末民国初期に刊行された唱本については、数十冊が束ねられて帙に収納されており、元々破損しやすい上に薄い小冊子なので、この状態のままでは損壊や散逸の恐れがある。風陵文庫の唱本は、そのサイズに合わ



せた特注のたとうに包んでおり、このような保存容器に移すのが望ましい。

### 3.3. 目録作成・データベース化

風陵文庫は、早稲田大学図書館内に設置された「図書館蔵古典籍データベース化推進プロジェクト室」(2005年4月開室, 2009年3月閉室)により2008年度にデータベース化され, 2009年度に古典籍総合データベースにて公開されている<sup>26</sup>。雙紅堂文庫は, 2006~07年度東京大学新規教育研究事業費によりデータベース化され, 「雙紅堂文庫全文影像資料庫」および「漢籍善本全文影像資料庫」より公開されている。

濱文庫については, 利用者の便のためにも, また2017年に予定されている箱崎地区から伊都地区への移転を円滑に進めるためにも, NACSIS-CATへの目録データ登録を進め, 詳細な目録を公開し, 所在を明確にする必要があるが, 和漢古書の目録データ作成には, 書誌学等の高度な専門的技術を求められるうえに, 濱文庫には通常の図書資料とは異なる特殊な資料が多く, すべての資料をNACSIS-CATに登録するまでにはかなりの時間を要する。そこで, まず2009年1月に『濱文庫(中国戯劇関係資料)目録』の電子画像を「九州大学貴重書画像データベース」(図15, [http://mars.lib.kyushu-u.ac.jp/infolib/meta\\_pub/G0000002RARE](http://mars.lib.kyushu-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000002RARE))にて公開した。ついで2012年3月, テキストデータ化した『濱文庫目録』を「九州大学所蔵コレクション目録データベース」(図16, [http://mars.lib.kyushu-u.ac.jp/infolib/meta\\_pub/G0000002MANULIB](http://mars.lib.kyushu-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000002MANULIB))にて公開した。これは紙媒体の同目録に散見された誤りを可能な限り修正したうえで, 徳元美智子氏作成『濱文庫2008年度追加分目録』を追加した内容となっている。これにより, NACSIS-CATへの登録が完了するまでの間, 利用者に目録情報を提供するとともに, OPAC等では実現できない通覧性を確保することが可能になった。新たなデータベースを立ち上げるのではなく, 既存のデータベースを活用することにしたのは, もちろんコストを抑えるという意味もあるが, 「九州大学所蔵コレクション目録データベース」には, 碩水文庫・逍遙文庫等の漢籍を数多く含む文庫の簡易目録がすでに公開されており, それらと統合的に検索できるという利便性もあるからである。さらに前述の大井文庫や中学修猷館教師益田古峯の旧蔵書からなる益田文庫<sup>27</sup>等, 六本松分館が所蔵していたコレクションも含まれており, 今はなき六本松分館の旧観を窺うこともできるだろう。

また, 現在作成中の唱本目録については, 科学研究費補助金・基盤研究(C)「濱文庫所蔵唱本目録の作成」(平成23~27年度, 課題番号23520437)の交付を受けて, 将来的に電子目録の公開が可能なフォーマットに則りデータ等を蓄積しており, 最終年度には紙媒体の目録を完成させる予定である。しかし, 風陵文庫および雙紅堂

文庫のような, すべての唱本の画像を閲覧できるデータベースの作成には, 何らかの資金を別に獲得する必要がある, そのめどは立っていないのが現状である。

濱文庫の中国演劇資料については, 黄仕忠氏の精力的な調査・紹介により海外の研究者にも近年その価値が知られるようになってきた<sup>28</sup>。風陵文庫および雙紅堂文庫に比べて, 保存状態や目録・データベースで立ち遅れていることは否めないが, 今後長期的に改善が図られ, 中国演劇資料の宝庫として末長く保管・活用されることを期待したい。



図15 九州大学貴重書画像データベース

[http://mars.lib.kyushu-u.ac.jp/infolib/meta\\_pub/G0000002RARE](http://mars.lib.kyushu-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000002RARE)



図16 九州大学所蔵コレクション目録データベース

[http://mars.lib.kyushu-u.ac.jp/infolib/meta\\_pub/G0000002MANULIB](http://mars.lib.kyushu-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000002MANULIB)

## 4. おわりに

最後に, 濱先生が中丸均卿との共著『北平の中国戯』(東京: 秋豊園, 1936)に記した「はしがき」を引用して, 本稿を閉じたい。ここには自著への思い入れ——それは自身のコレクションへの思いでもある——だけでなく, 中国演劇をこよなく愛した濱先生の人柄がよ

く表れており、あたかも先生の声が聞こえてくるかのようである。

偶然にも戯迷の都「燕京」に遙々日本から戯迷兩人が落合つた。兩人とも總ゆる舞臺上の物事なら一回位の飯はさしおいてもと云ふ位な處から、電話での兩人應答の大部分は、戯の時間の打合せにのみ用ひられた。「今月は毎日見てもいゝな」「御碑亭、此前の程硯秋に比べて今日の尚小雲はどうだろう」幸ひな事に毎日、殊にシーズンになると、何處かで必ず相當な戯がある。日によると三四人もズラリと、いゝ芝居を出して競つて、たまには同じ日に程硯秋の御碑亭、尚小雲の御碑亭、譚富英の御碑亭、兩人とも體の三つないのを残念に思つた。「支那芝居御研究だ相で」そんな事を云はれると、夫が口實になつて益々此の享樂は劇しくなる。御ひいきをつくる、劇評をやらかす、ミーチャン、ハーチャン的に名優の寫眞が欲しくなり、東安市場、西單商場をはせめぐつて、蒐め出す。名優達の面白い表情、美しい線が一回切りで消え失せるのが無性に惜しく、せめてとまづい寫眞もとりにたくなつた。美しい聲の色々を又せめて、罐づめでもいゝからと、レコードを蒐集したくなつた。この慾がつもりつもつて、二年にもなると質はどうでも量丈は相當なものとなつてみた。アルバムに張つた數々の思出、一つ整理して記念帖でも作りたい。僕等の處に遊びに来る連中に「燕京の芝居はネ」と云ひ乍ら、半ば處か大いに得意になつて見せる品々を整理して、一々何から何迄、引っぱり出さないでも濟む様にして見せたいと思つたのが此本の出版の由來。

第一章では、中國劇の今に落つくまでを曲調を主として、ザツと語り、そんな系統があるのかとオボロゲにでも分つて頂いたら、第二部で、名優達をつかまへたスキ勝手な評を讀んで頂くと云ふ計畫、と云ふよりも中にはさんだ、寫眞で中國の戯に對する良き趣味を少しでもわかつて頂いたらと、少々變な寫眞だらうが、兩人の寫した頗るまづい寫眞だらうがオク面もなく出した次第。

只集めた、レコード等が出版の形式で一頁めくる毎に崑曲が聞えたり、二簧が聞えたり、する本が出来ないのが残念至極。(pp. 1-2)

## 謝辞

濱文庫受け入れ時の状況について、九州大学名誉教授・合山究先生と東京大学名誉教授・田仲一成先生よ

りご教示を賜つた。「民衆小説戯曲讀本」をはじめとする濱文庫資料の価値について、中国演劇研究の専門家である大阪市立大学の松浦恒雄先生には種々のご教示を賜つた。『新刻校正買賣蒙古同文雜字』については、神戸市外国語大学の竹越孝先生、九州大学人文科学研究院の久保智之先生よりご教示を賜つた。風陵文庫の現状については、早稲田大学図書館特別資料室久保尾俊郎氏より、雙紅堂文庫の現状については、東京大学東洋文化研究所図書室の皆様よりご教示を賜つた。九州大学附属図書館六本松分館図書情報係長(当時)の田中由紀子氏には移転で多忙な時期にもかかわらず、濱文庫受け入れ時の事務書類を捜し出していただいた。記して感謝申し上げたい。

## 参考文献(濱文庫に直接関連する文献のみ。それ以外は注を参照)

- [1] 落石清編、濱文庫(中国戲劇關係資料)目録、福岡:九州大学附属図書館教養部分館、1987; 1988, pp. 48-75.
- [2] 徳元美智子、濱文庫 2008 年度追加目録 [電子ファイル版]、福岡:九州大学附属図書館六本松分館、2008.
- [3] 中里見敬・山根泰志編、“濱文庫所蔵唱本目録稿(一)”, 言語科学(九州大学大学院言語文化研究院言語研究会) 45, pp. 117-137, 2010.
- [4] 中里見敬・山根泰志・戚世雋編、“濱文庫所蔵唱本目録稿(二)”, 言語科学(九州大学大学院言語文化研究院言語研究会) 46, pp. 147-166, 2011.
- [5] 中里見敬・山根泰志・戚世雋編、“濱文庫所蔵唱本目録稿(三)”, 九州大学附属図書館研究開発室年報(九州大学附属図書館) 2010/2011, pp. 65-74, 2011.
- [6] 中里見敬・山根泰志・戚世雋編、“濱文庫所蔵唱本目録稿(四)”, 言語科学(九州大学大学院言語文化研究院言語研究会) 47, pp. 91-110, 2012.
- [7] 中里見敬、“濱文庫所蔵戲單編年目録”, 中国文学論集(九州大学中国文学会) 37, pp. 155-168, 2008.
- [8] 中尾友香梨、“濱文庫の明清樂資料について”, 中国文学論集(九州大学中国文学会) 37, pp. 121-135, 2008.
- [9] 中里見敬、“濱文庫所蔵の歐陽予倩致濱一衛書簡について”, 中国文学論集(九州大学中国文学会) 39, pp. 150-164, 2010.
- [10] 戚世雋・土屋育子・中里見敬、“濱文庫所蔵唱本『美女五更思春』訳注”, 言語文化論究(九州大学大学院言語文化研究院) 28, pp. 323-336, 2012.
- [11] 戚世雋・土屋育子・中里見敬、“濱文庫所蔵唱本『改良文明棍新編』訳注”, 文学研究(九州大学大学院人文科学研究) 109, pp. 31-50, 2012.
- [12] 中里見敬・中尾友香梨、濱一衛と京劇展: 濱文庫の中国演劇コレクション、福岡:九州大学附属図書館、2009.
- [13] 中里見敬、“日本九州大學濱一衛文庫所蔵戲劇資料簡介”, 第八屆中國古代小説戲曲文獻暨數字化研討會(北京:首都師範大學中國傳統文化數字化研究中心) pp. 174-180, 2009.
- [14] 濱一衛著、中里見敬整理、“曲阜徐州開封洛陽西安旅行記”, 言語文化論究(九州大学大学院言語文化研究院) 25, pp. 178-200, 2010.
- [15] 濱一衛著、中里見敬整理、中国の戲劇・京劇選: 濱一衛著訳集、福岡:花書院(九州大学大学院言語文化研究院 FLC 叢書 3), 2011.

<sup>1</sup> 羽太信子の両親が同居していたことは、上尾龍介「那須さんの北京語：中国語の達人たち」（『中国文学論集』11, 九州大学中国文学会, 1982）に「周作人の家は広大な旧男爵邸で、その奥まった院子に日本人であった夫人の御両親がひっそりと暮して居られた」（p. 17）という記述による。

<sup>2</sup> 『苦茶随筆』（上海：北新書局, 1935）〔浜文庫／新学評論／4〕, 『苦竹雜記』（上海：良友圖書印刷公司, 1936）〔浜文庫／新学評論／6〕, 『瓜豆集』（上海：宇宙風社, 1937）〔浜文庫／新学評論／7〕.

<sup>3</sup> 『風雨談』（上海：北新書局, 1936）〔浜文庫／新学小説／25〕.

<sup>4</sup> 六本松分館に保管されていた「物品請求及び命令書」によると、1986年2月28日付けで2,500,000円、1986年6月19日付けで549,480円の2回に分けて支出があり、計3,049,480円で受け入れていることが確認される。

<sup>5</sup> 「物品請求及び命令書」によると、1988年2月と3月にマイクロフィルム撮影とカセットテープ録音の支払記録がある。

<sup>6</sup> 『濱文庫 2008 年度追加目録』（〔電子ファイル版〕福岡：九州大学附属図書館, 2008）.

<sup>7</sup> 土屋礼子「エフェメラとしての戦時宣伝ビラ：FELO 資料の場合」（『アジア遊学』111, 東京：勉誠出版, 2008年7月）に次のようにいう。「エフェメラとは、一日ないし短期間だけしか存在しないものを指すギリシャ語を起源とする語で、つかの間だけ用いられる意図で作られ、使われた後はたいていすぐに捨てられ、保存されることもなく、儚く消えてしまう一時的な印刷物の総称である。（中略）エフェメラはマス・メディアが成長した後も減びることなく、むしろその陰でマス・メディアとともに発展し、マス・メディアに伴走してきたより身近なメディアといえよう。したがって、エフェメラは、特定の集団の状況や意見、生活史などをより密着した形で知るための重要なメディアであるとともに、基幹メディアが届かない領域のコミュニケーションを機動的に担う」（pp. 4-5）

<sup>8</sup> 松浦恒雄『濱文庫所蔵戯曲単劇目俳優データベース』（大阪市立大学大学院文学研究科重点研究・個別研究プロジェクト「二〇世紀中国演劇史における戯曲・特刊の基礎的研究」, 2008）. 松浦恒雄「京劇戯曲の変遷」（『新中国建国前後における伝統劇の多角的研究』平成18-19年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）研究成果報告書（課題番号18520273）, 研究代表者：松浦恒雄, 2008）も参照。

<sup>9</sup> 中塚亮「青木文庫蔵戯曲目録」（『名古屋大学中国語学論集』20, 名古屋：名古屋大学中国語学学会, 2008）参照。

<sup>10</sup> 中丸均卿・濱一衛『北平的中国戯』（東京：秋豊園, 1936）p. 54.

<sup>11</sup> 濱一衛『支那芝居の話』（東京：弘文堂書房, 1944）p. 170. 復刊は、濱一衛『支那芝居の話』（アジア学叢書76, 東京：大空社, 2000）.

<sup>12</sup> 中里見敬「濱文庫所蔵戯曲単編年目録」（『中国文学論集』37, 2008）p. 8(161)の「濱文庫（整理済み分）戯曲単編年目録」の108に、この戯曲を1936年10月20日としたのは誤りである。ここに訂正する。

<sup>13</sup> 中国で出版された戯曲の図録として、杜広沛収蔵、婁悦撰『旧京老戯曲：從宣統到民国』（北京：中国文联出版社, 2004）, 韓朴主編『首都図書館蔵旧京戯報』全2冊（北京：学苑出版社, 2004）がある。

<sup>14</sup> 中里見敬「濱文庫所蔵戯曲単編年目録」（『中国文学論集』37, 2008）. 注12も参照。

<sup>15</sup> 早い時期の目録として、劉復・李家瑞編『中国俗曲総目稿』（北平：中央研究院歴史語言研究所, 1932）や李家瑞編『北平俗曲略』（北平：国立中央研究院歴史語言研究所, 1933）がある。台湾で刊行された全500冊からなる『俗文学叢刊』（台北：中央研究院歴史語言研究所, 新文豊出版, 2001）は、中央研究院歴史語言研究所が所蔵する唱本を影印出版したものである。

<sup>16</sup> 早稲田大学図書館編『風樓文庫目録』（早稲田大学図書館文庫目録第17輯, 東京：早稲田大学図書館, 1999）参照。影像是 <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/furyobunko/index.html> で公開。

<sup>17</sup> 黄仕忠「雙紅堂文庫蔵清末四川「唱本」目録」（『東洋文化研究所紀要』第148冊, 東京：東京大学東洋文化研究所, 2005）, 黄仕忠「雙紅堂文庫蔵清末民初北京木刻, 石印本「唱本」目録」（『東洋文化研究所紀要』第150冊, 2007）, 黄仕忠「雙紅堂文庫蔵北京排印本唱本目録」（『東洋文化研究所紀要』第151冊, 2007）参照。影像是 <http://hong.ioc.u-tokyo.ac.jp/> で公開。

<sup>18</sup> 尾上兼英編『倉石文庫漢籍分類目録集部(稿)』（昭和54年度文部省科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書, 東京：尾上兼英, 1980）, 黄仕忠「倉石文庫戯曲曲藝書目」（『東洋文化研究所紀要』

第144冊, 2003）参照。

<sup>19</sup> 長澤規矩也「わが菟書の歴史の一斑：戯曲小説書を中心に」（長澤規矩也編『東京大学東洋文化研究所蔵雙紅堂文庫分類目録』東京：東京大学東洋文化研究所, 1961）pp. 71-72.

<sup>20</sup> 濱一衛著, 中里見敬整理「曲阜徐州開封洛陽西安旅行記」（『言語文化論究』25, 福岡：九州大学大学院言語文化研究院, 2010）p. 189(12), および注43参照。

<sup>21</sup> 中尾友香梨『江戸文人と明清楽』（東京：汲古書院, 2010）参照。

<sup>22</sup> 「民衆小説戯曲読本」の重要性については、日本中国学会での我々の発表に対して、松浦恒雄氏によって初めて指摘された。その後、「第二回日中伝統芸能研究交流会：都市のメディア空間と伝統芸能」（2012年3月10日, 大阪市立大学）において松浦恒雄「民衆小説戯曲読本」について」と題する口頭発表が行われ、のち「公開講演・演奏会「淡路人形浄瑠璃と大阪」実施報告／第二回日中伝統芸能研究交流会報告書：都市のメディア空間と伝統芸能」（大阪：大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター, 2012）に同名の論文が収録された。本項の記述は全面的に同論文に依拠するものである。

<sup>23</sup> 春花『清代滿蒙文詞典研究』（瀋陽：遼寧民族出版社, 2008）pp. 454-455に同書の解題がある。春花「清代におけるモンゴル語の辞書の発展と変遷について」（国際ワークショップ「モンゴル語の辞書」, 東北大学東北アジア研究センター主催, 2011年2月12~13日, <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/staff/hkuri/01.pdf>）も参照。

<sup>24</sup> Nicholas Poppe, Leon Hurvitz, and Hidehiro Okada, *Catalogue of the Manchu-Mongol Section of the Toyo Bunko* (Tokyo: Toyo Bunko, Seattle: University of Washington Press, 1964) p. 161.

<sup>25</sup> 山根泰志「旧制福岡高等学校蔵書」（『九州大学附属図書館研究開発室年報』2010/2011, 2011）参照。

<sup>26</sup> 松下真也「古典籍総合データベースの構築と展開」（『早稲田大学図書館紀要』53, 東京：早稲田大学図書館, 2006）, 「古典籍総合データベース：構築の歩みと今後の課題」（『早稲田大学図書館年報』2008年度, 東京：早稲田大学図書館, 2009）参照。

<sup>27</sup> 益田文庫については、柴田篤「益田古峯小伝：九州大学「益田文庫」の旧蔵者」（『中国哲学論集』34, 福岡：九州大学中国哲学研究会, 2008）, 柴田篤「益田文庫：漢詩を能くした漢文教師の旧蔵書」（『九州大学百年の宝物』（東京：丸善プラネット, 2011, pp. 144-145）参照。

<sup>28</sup> 黄仕忠『日藏中國戯曲文獻綜録』（中国俗文学研究目録叢刊第一種, 桂林：広西師範大学出版社, 2010）. 黄仕忠『日本所蔵中國戯曲文獻研究』（北京：高等教育出版社, 2011）. ほかに濱文庫を利用した研究として、康保成「“濱文庫”讀曲札記（三則）」（『藝術百家』1999年第1期, 南京：江蘇省文化藝術研究院, 1999）がある。中国語による濱文庫の紹介は、中里見敬「日本九州大學濱一衛文庫所蔵戯曲資料簡介」（第八屆中國古代小説戯曲文獻暨數字化研討會, 北京：首都師範大學中國傳統文化數字化研究中心, 2009）参照。

本稿は、日本中国学会第63回大会（2011年10月9日, 九州大学）における戚世雋・中里見敬・山根泰志・李麗君・土屋育子・中尾友香梨の共同による口頭発表「九州大学附属図書館濱文庫について：その特色と整理の現状」をもとに、新たに書き下ろしたものである。

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)「濱文庫所蔵唱本目録の作成」（2011~2015年度, 課題番号：23520437）による成果の一部である。